愛媛大学教育学部紀要　教育科学　第50巻　第２号　17～35　2004

日本の児童生徒における希望，信頼，寛容の発達とその相互的関連[1]

渡　辺　弘　純
（教育心理学研究室）
渡　邊　　俊
（愛媛県立伊予高等学校）
David S. Crystal
（Georgetown University）
中　嶋　恵　美
（松山市立三津浜小学校）

（平成15年10月23日受理）

Relationships between hope, trust, and tolerance for human diversity in Japanese children and adolescents

Hirozumi WATANABE, Takashi WATANABE, David S. CRYSTAL and Emi NAKAJIMA

問　　題

日本の中学生や高校生の希望の喪失が，各種の調査結果として報道されている（渡辺，2002；渡辺，2003b）。諸外国の資料と比較しても，この傾向は際立っている。中国と日本の中学生を比較したわれわれの最近の調査でも確認されている（渡辺，2003b）。いうまでもなく，これは自分の特徴について控え目に回答する日本人的特徴の反映であるとも解される（東，1994）が，希望喪失の客観的指標の変化（橘木，1998；佐藤，2000）から説明することも可能である。われわれは，日本の児童生徒の希望を育むには，何が必要であるかについて探究したい。

希望を取り上げるに際しては，まず，希望とは何かが問われなければならない。近年，精力的に希望の実証的研究を展開している Snyder ら（Snyder et al., 1991）は，目標（Goals）と経

[1] この研究は，平成13年度～平成15年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）（２）（課題番号13610143）による助成を受けて行われたものである。この論文の一部は，日本心理学会第67回大会において発表されている（渡辺弘純，2003a）。

路（Pathways）と発動力（Agency）からなる希望概念を提出している（Snyder，2000）。これに対して，北村（1983）は，具体的な目標や期待を含むとしても，これらと区別され，これらを超えた概念としての希望を提案する。すなわち，彼は，希望を「来るべき未来の状況に明るさがあるという感知に伴う快調をおびた感情」であると定義的に表現するのである。わが国において，希望についての探究は，非常に限られたものであったが，最近，この北村の希望概念を採用して，大橋（2002a）や大橋ら（大橋・柏木・恒藤，2002；大橋・恒藤・柏木，2003）は，希望についての実証的研究を展開している。彼らは，北村の希望の定義に近いと評価するHerth（1991）の尺度を用いて研究を進めている。その上で，さらに，単なる質問紙調査の枠を超えた研究へと展開し，高齢者の希望に焦点を当て，高齢化社会が急速に進むわが国の課題に立ち向かおうとするのである（大橋，2002b）。

希望概念について明確にすることが求められるが，Snyder（2000）と北村（1983）の希望概念は大きく異なるにもかかわらず，実際の研究において使用されている尺度（Snyder et al., 1991）を見る限りにおいて，類似する側面が多いと指摘することもできる。なぜなら，Snyder らは，希望における目標の位置をきわめて重視するにもかかわらず，実際の尺度構成においては，経路（Pathways）と発動力（Agency）のみを採用して，目標（Goals）を除外しているため，具体的な目標や期待を想定しない「漠然とした」希望概念を提起した北村の考え方に重なるのである。希望概念の検討は，今後の課題として残されている。

では，この希望は，何によってもたらされるのであろうか。Erikson ら（エリクソン・エリクソン・キヴニック／朝長・朝長訳，1990）は，「基本的信頼と不信の間の緊張は，人生の極く初期にまで遡る。その時期の健康な乳児は，頼りになる支えと反応を環境が与えてくれる中で絶えず育っていく信頼を通して，希望の源を発達させる。」などと述べ，希望が信頼によって育まれると論じるのである。

この希望を育むとされる信頼については，多数の研究が報告されている。最もよく知られているのは，Rotter（1967）のものであり，彼は，社会心理学の立場から，他者信頼について，対人関係信頼尺度（Interpersonal Trust Scale）を構成している。ただし，この尺度は，日常的に接している他者に対する信頼というよりも，主要には「社会組織やシステム」への信頼を取り扱っているとも言える。わが国においても，信頼感尺度を構成する試みがいくつか報告されている。天貝（1995）は，日常的で具体的に接触する他者と自己への信頼感尺度を作成し，「対自的信頼（自己信頼）」，「対他的信頼（他者信頼）」，及び「不信」の３つの下位尺度から構成している。また，谷（1998）は，エリクソンに立脚して信頼感尺度の作成を試み，「基本的信頼感」と「対人的信頼感」から，この尺度を構成している。一方，渡邉（1999）は，高校生の対人関係の困難さについて自由記述による回答を求め，これに基づいた調査項目群によって調査を実施した結果として，信頼感尺度を構成している。彼の信頼感尺度は，「不信」，「自己信頼」，及び「関係信頼」の下位尺度から成り，名称においては天貝のものと非常に類似している。しかし，彼の「自己信頼」は，他者のなかでの自己信頼感であり，内容的には異なっている。

これらの研究においても認められるが，Erikson（1959）を持ち出すまでもなく，一般に信頼には自己信頼と他者信頼の両面があると考えられている。自己信頼と他者信頼を論じる高垣（1999）は，両者が同じものの裏表であると述べ，彼の言う「自己肯定感」が，他者信頼と自己信頼から成り立つ感覚であると展開している。今日，自己肯定感の絶対的低下が声高に指摘

されている。このような展開からは，信頼，とりわけ自己信頼が，Rogers（1951，1959）の提唱する自己受容と密接な関連のもとにあると考えられるのである。わが国の児童生徒の信頼感が，諸外国との対比において，どのような相対的位置にあるかを明らかにする研究は，われわれの報告（渡辺，2003b）がある以外，多数報告されているとは言えないが，一般世上における議論からも，今日においてその確立やこれを実感することの困難さが容易に推測されるのである。

信頼が，自己信頼と他者信頼から成り立つと考えるとき，他者と異なる特徴を持つ自己への寛容と自己と異なる特徴を持つ他者への寛容から成り立つとされる人間の多様性への寛容との相似に気づかされる。すなわち，信頼があるから寛容になれるのではないかと考えられるのである。しかし，人間の多様性への寛容に関する研究は，希望以上に少なく，わが国おける発達的研究にいたっては，ほとんどないのが現状である。もちろん，攻撃性や共感性などを寛容研究に含めれば，多様な形で寛容研究が蓄積されているとする立場を取ることができるのは言うまでもない。

われわれは，今日の児童生徒が，多様な諸特徴を持つ他者と共に生きることの困難を，「いじめ」や不登校（登校拒否）あるいは「ひきこもり」として表面化させているのではないかと考え，その基底にある機構を探究しようとして，過去十数年にわたって，この課題に取り組んできた（渡辺，1994，2001）。この探究の過程で得られた資料は，日本の児童生徒は，（１）自己と異なる特徴を持つ他者へは，相対的に寛容であるのに対して，他者と異なる特徴を持つ自己に対しては寛容になれないこと，（２）個人の水準では，自己と異なる特徴を持つ他者に対して寛容であるのに，集団の水準，すなわち，自己を含む集団への異なる特徴を持つ他者の受け入れについては，必ずしも寛容であるとは言えないこと，（３）自己と異なる特徴によって，寛容さに相違が認められ，また，発達的変化の方向も相違すること，たとえば，児童生徒に限定すると，年齢が高くなると，暴力を振るうことや運動が不得手であることや暗い性格については寛容でなくなるが，髪を染めることなどの外見や異性のような振る舞いをすることについては寛容になること，などを示していた。

この研究においては，さまざまな地点から，今日の児童生徒，あるいはわれわれ自身の，その喪失からの脱却が課題とされている希望と信頼と人間の多様性への寛容を取り上げて，日本の児童生徒を対象に調査し，それぞれの発達的変化，及び三者の相互的関連を明らかにすることを目的とする。

方　　法

１．調査への参加者

愛媛県にある地方都市の小学校４年生３クラス，計97名，中学校１年生３クラス，計94名，及び高校１年生３クラス，計110名，総計301名を対象に調査が実施された。調査への参加者を

表１　調査への参加者

学　年	小学校４年生	中学校１年生	高 校 １ 年 生	合　　計
男　　子	47	54	52	153
女　　子	50	40	58	148

学年別・性別に示したのが，表１である。高校については，特に，代表的な（平均的な）学校を選択するよう考慮した。

２．調査時期，調査場所，及び調査手続き

2002年１月から３月にかけて，調査への参加者が在籍している学校の教室で，集団的調査として実施された。小学生の調査においては，一問ずつ教師が読み上げた後に回答するなど，児童が質問を理解した後に回答するよう配慮された。中学生と高校生については，それぞれのペースで回答した。所要時間は，小学生について約40分，中学生と高校生について約20分であった。調査用紙の回収に際して，高校生については回収箱で回収するなど，プライバシーの保護や回答の歪曲が行われないための工夫がなされた。

３．調査内容の構成

調査内容は，希望，信頼，寛容，及び人生の目標から構成されていた。なお，人生の目標については，別の機会に検討することにし，ここでは，人生の目標以外の調査内容について報告する。

（１）希望：以下の３種類の調査項目群（尺度）が用いられた。

① 児童希望尺度：Snyder ら（Snyder et al., 1997）の児童用特性希望尺度（Trait Children's Hope Scale）の６項目がそのまま採用された。これは，Snyder ら（Snyder et al., 1991）が開発した特性希望尺度の児童版であり，経路（Pathways）３項目と発動力（Agency）３項目から構成されている。表２に示されている日本語への翻訳は，日本語にも堪能な米国の研究者と日本の研究者の共同作業として行われた。調査への参加者は，これらの項目に対して，６件法（いつもそうである－６点，ほとんどのときそうである－５点，わりとよくそうである－４点，ときどきそうである－３点，たまにそうである－２点，いつもそうでない－１点）で回答することが求められた。

表２　児童希望尺度項目群

調　査　項　目
A01　私はかなりよくやっていると思う。（発動力）
A02　私の生活にとって，とても大事なものを手に入れるために，多くのやり方を考えることができる。（経路）
A03　私は，私と同じ年のほかの人と同じくらいにはやっている。（発動力）
A04　困ったことがあるとき，私は，それを解決するために多くのやり方を考えることができる。（経路）
A05　私は，私が今までにしてきたことが，将来，私を助けてくれると思う。（発動力）
A06　他の人がやることをあきらめようとするときでも，私は，困ったことを解決するやり方を考えることができる。（経路）

② 私の希望調査項目群：児童希望尺度を構成する項目内容を詳細にみると，日常的に考える希望とは異なっていることに気づく。希望というよりむしろ「自己信頼」と表現するのが適切な項目群である。このため，常識的に希望を構成すると考えられる項目群からなる私の希望調査項目群を，米国と日本の研究者の討論を通じて，構成した（表３）。これには,4件法（とてもあてはまる－４点，すこしあてはまる－３点，あまりあてはまらない－２点，まったくあてはまらない－１点）で回答することが求められた。

表３　私の希望調査項目群

調　査　項　目
A07　私は，明日は今日よりももっとよくなるだろう，と思っている。
A08　将来，私は，自分の目標をやりとげることができるだろう。
A09　大きくなったら，私は，社会の中で大事な役割をはたすことができるだろう。
A10　将来，私は，自分でやろうとする多くのことに，成功するだろう。
A11　私は，私が将来やりたいことについて，たくさんの計画をもっている。
A12　もし，私が努力するなら，社会の中で成功するチャンスがあるだろう。

③　社会希望調査項目群：私の希望調査項目作成の過程で，希望には，私の希望と同時に，社会に対する希望もあること，これらを区別する必要があることに気づき，社会希望調査項目群を，米国と日本の研究者の討論を通じて，構成することにした（表４）。ここでも，私の希望と同様に，４件法（とてもあてはまる－４点，すこしあてはまる－３点，あまりあてはまらない－２点，まったくあてはまらない－１点）で回答することが求められた。

表４　社会希望調査項目群

調　査　項　目
将来について：
A13　日本は，今よりよくなっていくだろう。
A14　日本の人々は，今よりも，お互いにもっと助け合うようになるだろう。
A15　日本の人々は，今よりも，もっと環境が悪くならないよう気をつけるようになるだろう。
A16　日本で生活することが，今よりも，もっと危険になるだろう。（逆転項目）
A17　日本の人々は，今よりも，もっと希望をもつようになるだろう。
A18　日本では，お金持ちと貧しい人の違いがなくなっていくだろう。

（２）信頼：表７に示される渡邉（1999）の信頼感尺度の18項目が採用された。渡邉は，下位尺度として，不信，他者の中での自己信頼，及び関係信頼を区分している。小学生の回答の容易さを優先して，渡邉の以前の研究と異なり，ここでは,4件法（とてもあてはまる－４点，すこしあてはまる－３点，あまりあてはまらない－２点，まったくあてはまらない－１点）で回答することが求められた。

（３）寛容：渡辺（2001）の調査項目から,「暴力を振るう子」,「運動が苦手な子」，及び「暗い感じの子」といった多少とも否定的な３つの特徴を持つ子どもに関する質問を抜粋し，それぞれについて，シナリオの形で，調査への参加者に提示し，５件法による回答を求めた。

具体的には，表５に「暴力を振るう子」の例が示されているように，この特徴を持つ子どもが，仲間集団（グループ）の一員である場合に，この特徴のために，何らかの仲間としての集

表５　「暴力を振るう子」のシナリオ（男子用）と調査への参加者に対する２つの質問

仲の良い５人のグループがあります。そのグループの１人，太郎という子は，時々他の子に暴力を振るいます。ある日，そのグループは，商店街へ買物に行くことにしました。太郎を除く，そのグループの子たちは，太郎が誰かに暴力を振るうことを心配して，太郎を誘わないことに決めました。

（１）太郎を誘わないと決めたことに，あなたはどのくらい賛成ですか，反対ですか。

1	2	3	4	5
まったく反対	少し反対	賛成でも反対でもない	少し賛成	とても賛成

（２）グループに受け入れられるために，太郎はどのくらい変わるべきだと思いますか。

1	2	3	4	5
まったく変えなくてよい	ちょっとだけ変える	いくらか変える	かなり変える	大きく変える

表６　「運動が苦手な子」のシナリオ（女子用）と調査への参加者に対する２つの質問

春子は，スポーツに興味がなく，チームスポーツがとても下手です。春子は走るのも遅い子です。また，キャッチボールでボールを受けそこなったり，バレーボールのサーブを返せなかったりします。
（１）あなたは，どのくらい，春子のような子と友だちになりたいですか。
1――2――3――4――5
まったくなりたくない　ちょっとだけなりたい　いくぶんなりたい　かなりなりたい　とてもなりたい
（２）あなたは，どのくらい春子と似ていますか，ちがっていますか。
1――2――3――4――5
とても似ている　少し似ている　どちらともいえない　少しちがっている　とてもちがっている

団活動の遂行にとって障害となることが想定されたため，この特徴を持たない集団の成員全員が，この特徴を持つ子を，集団活動へ誘わないと決定した場面において，調査への参加者が，仲間集団の決定に対してどのような態度を取るのか，２つの質問をして，回答を求めた。さらに，表６に「運動が苦手な子」の例が示されているように，上述の３つの特徴を持つ子どもに対して，調査への参加者が，個人的に受容するか，自分と似ているととらえるかどうか，を問う２つの質問を行い，回答を求めた。

結　　果

調査への参加者から得られた評定値をもとにして，希望，信頼，及び寛容別に，因子分析を行って，それぞれの尺度を作成し，各尺度得点の年齢的変化と性による相違について明らかにした。その上で，各尺度間の関連について，相関，重回帰分析，及び共分散構造分析によって検討した。

１．希望尺度について

児童希望，私の希望，及び社会希望，それぞれの調査項目群に対する調査への参加者の得点をもとに，因子分析を行い，それぞれの尺度得点の年齢差と性差について検討した。

（１）児童希望尺度：児童希望尺度を構成する６項目の平均値において，男女に共通して，全体的に，最も高いのは，A05「私は，私が今までにしてきたことが，将来，私を助けてくれると思う」（平均値3.55，標準偏差1.44）であり，最も低いのは，A06「他の人がやることをあきらめようとするときでも，私は，困ったことを解決するやり方を考えることができる」（平均値3.00,標準偏差1.27）であった。A05で小学生の得点が特に高く，A06で高校生の得点が特に低かった。小学生では，A04の得点が最も低く，中学生では，A02の得点が最も高いことも特徴的であった。この得点をもとに，主因子法による因子分析を行ったところ，固有値１以上の因子は１つのみであった（固有値2.88，寄与率47.92）ので，１因子解を採用して検討を進めることにした。因子負荷量を大きい順に示す（カッコ内は共通性）と，A06 .76（.57），A01 .73（.53），A04 .72（.51），A02 .71（.50），A03 .68（.47），A05 .55（.30）となった。比較的大きい因子負荷量が示され，α係数は，α＝.77となっており，信頼性があると判断された。

児童希望の６項目を加算して，児童希望尺度総得点（平均点19.92；標準偏差5.33）を求めた。この値を従属変数とし，学年と性を独立変数とする２要因の分散分析を行った。ここでは，学年について，傾向（F(2,293)＝2.59，P＜.1）が認められるにとどまり，性と交互作用

には，有意差も傾向も認められなかった。児童希望尺度総得点の年齢的変化を性別に示したのが，図１である。図からは，学年が上がるに伴って得点が減少すること，及び男子の得点が女子の得点より高いことが観察される。

（２）私の希望尺度：私の希望尺度を構成する６項目の平均値において，男女共，全体的に，最も高いのは，A12「もし，私が努力するなら，社会の中で成功するチャンスがあるだろう」（平均値2.97，標準偏差.85）であり，最も低いのは，A09「大きくなったら，私は，社会の中で大事な役割をはたすことができるだろう」（平均値2.29，標準偏差.81）であった。A09で高校生の得点が特に低かった。小学生では，A08の得点が最も高いことも特徴的であった。この得点をもとに，主因子法による因子分析を行ったところ，固有値１以上の因子は１つのみであった（固有値3.11，寄与率51.75）ので,1因子解を採用して検討を進めることにした。因子負荷量を大きい順に示す（カッコ内は共通性）と，A08 .83（.69），A10 .78（.61），A09 .77（.59），A12 .70（.49），A11 .63（.40），A07 .57（.32）となった。比較的大きい因子負荷量が示され，α係数は，α＝.80となっており，信頼性があると判断された。

私の希望の６項目を加算して，私の希望尺度総得点（平均点15.70；標準偏差3.64）を求めた。この値を従属変数とし，学年と性を独立変数とする２要因の分散分析を行った。ここでは，学年差に有意差（F(2,293)＝15.20，P＜.01），性差に傾向（F(1,293)＝3.71，P＜.1）が認められた。交互作用には，有意差も傾向も認められなかった。私の希望尺度総得点の年齢的変化を性別に示したのが，図２である。図からは，学年が上がるに伴って得点が減少すること，及び男子の得点が女子の得点より高いことが観察される。

（３）社会希望尺度：社会希望尺度を構成する６項目の平均値において，男女共，全体的に，最も高いのは，A15「日本の人々は，今よりも，もっと環境が悪くならないよう気をつけるようになるだろう」（平均値2.78，標準偏差.91）であり，最も低いのは，A18「日本では，お金持ちと貧しい人の違いがなくなっていくだろう」（平均値2.07，標準偏差.93）であった。しかし，小学生においては，A17が最も高く，A16が最も低かった。これに対して，高校生や中学生では，A16が最も高いことも特徴的であった。この得点をもとに，主因子法による因子分析を行ったところ，固有値１以上の因子は１つのみであった（固有値2.94，寄与率49.07）ので，１因子解を採用して検討を進めることにした。因子負荷量を大きい順に示す（カッコ内は共通性）と，A14 .81（.67），A13 .77（.59），A17 .72（.51），A16 －.65（.42），A18 .63（.40），A15 .61（.37）となった。A16は逆転項目として，以後逆転して集計された。α係数は，α＝.79となり，信頼性があると判断された。

社会希望の６項目を加算して，社会希望尺度総得点（平均点14.91；標準偏差3.82）を求めた。この値を従属変数とし，学年と性を独立変数とする２要因の分散分析を行った。ここでは，学年差に有意差（F(2,290)＝81.36，P＜.01），学年と性の交互作用に傾向（F(2,290)＝2.91，P＜.1）が認められた。性差には，有意差も傾向も認められなかった。社会希望尺度総得点の年齢的変化を性別に示したのが，図３である。図からは，小学生から中学生へかけて得点が急に減少すること，及び小学生や中学生では男子の得点が女子より高いのに対して，高校生では女子の得点が男子より高いことが観察される。

２．信頼尺度について

渡邉（1999）の信頼感尺度を構成する18項目の平均値において，男女とも，B10「人と人のつながりを大切に生きていきたい」（平均値3.55，標準偏差.63）が最も高く，特に，高校生女子は3.72と非常に高い数値であった。逆に最も低いのは，男女とも，B13「他人を信じるのは，ばからしいことだと思う」（平均値1.77，標準偏差.81）で，特に，小学生は，1.56となっている。

この得点をもとに，主因子法による因子分析を行い，固有値１以上の５因子を抽出した。しかし，５因子解で，バリマックス回転をしたところ，第４因子の項目は２つ，第５因子の項目は１つであるなど，因子を構成する項目のまとまりがみられなかった。また，第３因子から第４因子へかけて固有値の急な減衰（1.79から1.06へ）もみられた。元尺度が３つの下位尺度から成り立っていることも考慮し，３因子解を採用してバリマックス回転を行った結果は，表７に示す通りである。

この結果は，渡邉（1999）の３つの下位尺度を構成する項目と完全に一致していた。しかし，項目 B01は，因子負荷量が相対的に小さく，共通性も.22であることから，以後の検討では採用しないことにした。α係数は，第１因子α＝.71，第２因子α＝.71，第３因子α＝.71で，一応の信頼性が認められた。渡邉にしたがい，第１因子「不信」，第２因子他者の中での「自己信頼」，及び第３因子「関係信頼」と名づけられた。

各下位尺度項目の得点を加算し，それぞれの下位尺度総得点を算出した。不信の６項目を加算して，不信尺度総得点（平均点14.47；標準偏差3.34）を求めた。この値を従属変数とし，学年と性を独立変数とする２要因の分散分析を行った。ここでは，学年差（F(2,293)＝18.22,

表７　信頼感尺度項目の因子分析の結果（バリマックス回転後）

番号	項　目　内　容	F１	F２	F３	共通性
B05	たびたび自分のことがいやになってしまう。	.71			.56
B02	まわりの人に自分のことをわかってもらえないと思うことがある。	.70			.50
B17	みんなの中にいて，ひとりぽっちだと感じることが多い。	.59			.38
B11	自分はまわりの人に大切に思われていないと感じることが多い。	.58			.40
B08	なかなかやる気になれないことが多い。	.57			.36
B14	まわりの人に期待するが，いつもうらぎられる。	.52			.28
B15	自分はまわりの人から注目されていると感じる。		.73		.54
B18	自分は，ほかの人にたよりにされている。		.71		.58
B03	話し合いのとき，自分の意見が認められることが多い。		.58		.36
B12	自分がいないと，まわりの人はさびしがると思う。		.56		.42
B09	自分はまわりの人に影響をあたえる力があると思う。		.55		.33
B06	自分は他の人の役に立っていると思う。		.49		.39
B10	人と人とのつながりを大切にして，生きていきたい。			.79	.64
B04	人は助け合いながら生きていくべきだと思う。			.74	.60
B16	友だちといっしょにいると安心する。			.62	.42
B13	他人を信じるのは，ばからしいことだと思う*。			−.61	.47
B07	自分には，悩んでいるとき，なぐさめてくれる人がいる。		.31	.50	.39
B01	喜びや悲しみを他の人とともに感じることなどできないと思う*。			−.33	.22
	二　乗　和	2.67	2.58	2.57	
	寄　与　率（%）	14.84	14.34	14.27	
	累積寄与率（%）	14.84	29.18	43.45	

*印の項目は逆転項目である。

P＜.01）と性差（F(2,293)＝7.84，P＜.01）に有意差が認められた。学年と性の交互作用には，有意差も傾向も認められなかった。不信尺度総得点の年齢的変化を性別に示したのが，図４である。図からは，学年が上がるに伴って得点が上昇すること，及び男子の得点より女子の得点が高いことが観察される。

次いで，他者の中での自己信頼の６項目を加算して，自己信頼尺度総得点（平均点13.72；標準偏差3.10）を求めた。この値を従属変数とし，学年と性を独立変数とする２要因の分散分析を行った。ここでは，学年差（F(2,293)＝3.11，P＜.05）のみに有意差が認められた。性差と学年と性の交互作用には，有意差も傾向も認められなかった。自己信頼尺度総得点の年齢的変化を性別に示したのが，図５である。図からは，学年が上がるに伴った得点の下降が観察される。

さらに，関係信頼の５項目を加算して，関係信頼尺度総得点（平均点16.80；標準偏差2.62）を求めた。この値を従属変数とし，学年と性を独立変数とする２要因の分散分析を行った。ここでは，性差（F(2,293)＝12.47，P＜.01）に有意差が認められた。学年差（F(2,293)＝2.53，P＜.1），及び学年と性の交互作用（F(2,293)＝2.83，P＜.1）には，傾向が認められた。関係信頼尺度総得点の年齢的変化を性別に示したのが，図６である。図からは，女子の得点が男子よりも高いこと，全体としては，学年が上がるに伴って得点が下降すること，及び男子は学年の上昇に伴う得点の下降が認められるのに対して，女子ではこの傾向は認められず，高校生において高い得点が示され，そのため高校生における性差が際立っていることが観察される。

３．寛容尺度について

渡辺（2001）の寛容に関する12項目の平均値において，男女とも，C14「『暗い感じの子』と自分はとても違っている」（平均値4.13，標準偏差1.07）が最も高く，逆に最も低いのは，男女とも，C15「『暴力を振るう子』と友だちになりたい」（平均値1.63，標準偏差.98）であった。

この得点をもとに，主因子法による因子分析を行い，固有値１以上の４因子を抽出した。４因子解で，バリマックス回転をしたところ，表８に示す結果が得られた。α係数は，第１因子α＝.70，第２因子α＝.58，第３因子α＝.53，第４因子α＝.58であった。第１因子については，一応の信頼性が確認されたが，第２因子，第３因子，及び第４因子については，信頼性が確認されたとは言えない。しかし，項目内容のまとまりから，４因子解で今後の検討を進めることにした。項目内容を見ると，「運動が苦手な子」・「暗い感じの子」と「暴力を振るう子」は，別の因子に区分されていた。それぞれの因子は，その項目内容から，第１因子「一般拒否」，第２因子「暴力拒否」，第３因子「変化要請」，第４因子「一般相違」と名づけられた。

一般拒否の４項目を加算して，一般拒否尺度総得点（平均点11.81；標準偏差3.22）を求めた。この値を従属変数とし，学年と性を独立変数とする２要因の分散分析を行った。ここでは，学年差（F(2,293)＝5.55，P＜.01）のみに有意差が認められた。性差，及び学年と性の交互作用には，有意差も傾向も認められなかった。一般拒否尺度総得点の年齢的変化を性別に示したのが，図７である。図からは，小学生から中学生へかけて，得点が急上昇することが観察される。

また，暴力拒否の３項目を加算して，暴力拒否尺度総得点（平均点11.45；標準偏差2.46）を求めた。この値を従属変数とし，学年と性を独立変数とする２要因の分散分析を行った。こ

こでも，学年差（F(2,293)＝6.47，P＜.01）のみに有意差が認められた。性差，及び学年と性の交互作用には，有意差も傾向も認められなかった。暴力拒否尺度総得点の年齢的変化を性別に示したのが，図８である。図からは，学年が上がるに伴って得点が上昇することが観察される。

変化要請の３項目を加算して，変化要請尺度総得点（平均点8.83；標準偏差2.45）を求めた。この値を従属変数とし，学年と性を独立変数とする２要因の分散分析を行った。ここでは，学年差（F(2,293)＝2.76，P＜.1）に傾向が認められるにとどまった。性差，及び学年と性の交互作用には，有意差も傾向も認められなかった。変化要請尺度総得点の年齢的変化を性別に示したのが，図９である。図からは，中学生から高校生にかけて，得点が急に下降することが観察される。

一般相違の２項目を加算して，一般相違尺度総得点（平均点7.62；標準偏差2.02）を求めた。この値を従属変数とし，学年と性を独立変数とする２要因の分散分析を行った。ここでは，学年差（F(2,292)＝3.50，P＜.05）と性差（F(2,292)＝8.98，P＜.01）に有意差が認め

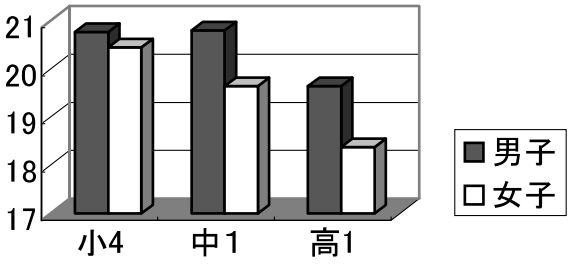

図１　児童希望の発達的変化

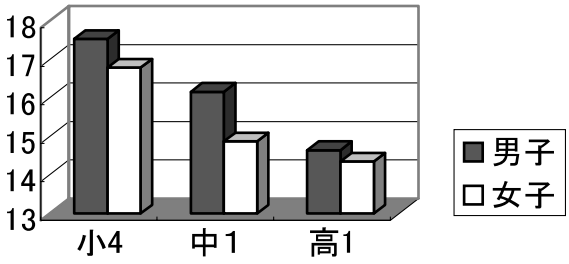

図２　私の希望の発達的変化

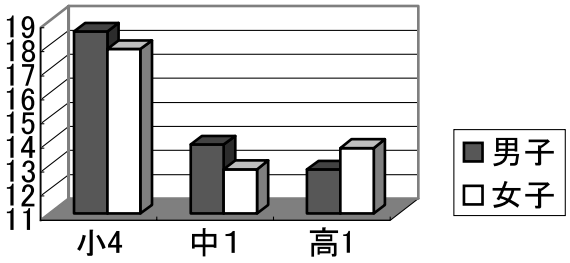

図３　社会希望の発達的変化

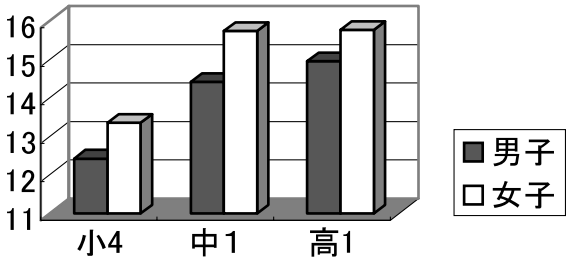

図４　不信の発達的変化

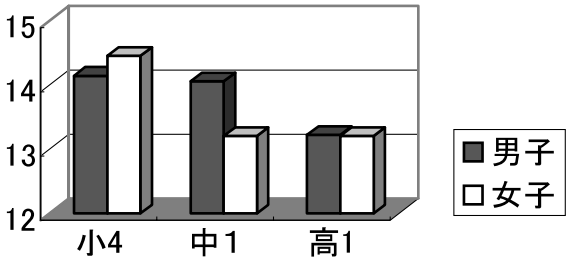

図５　自己信頼の発達的変化

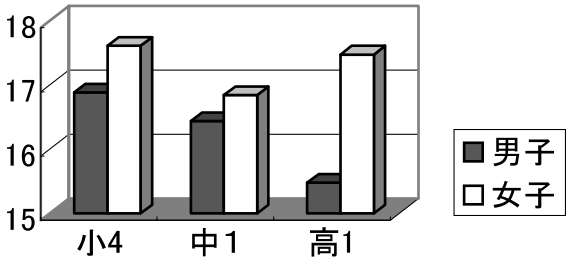

図６　関係信頼の発達的変化

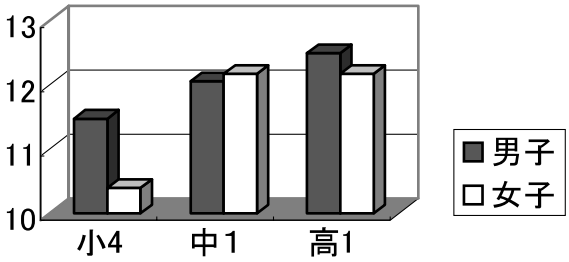

図７　一般拒否の発達的変化

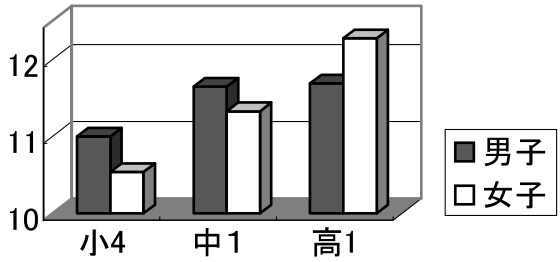

図８　暴力拒否の発達的変化

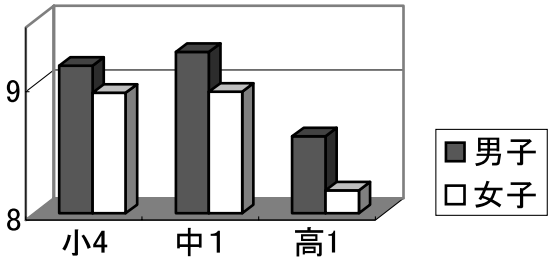

図９　変化要請の発達的変化

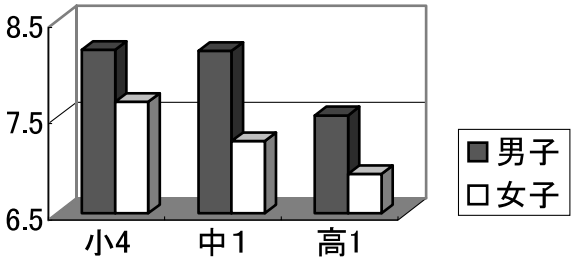

図10　一般相違の発達的変化

表８　寛容尺度項目の因子分析の結果（バリマックス回転後）

番号	項　目　内　容	F１	F２	F３	F４	共通性
C11	「運動が苦手な子」と友だちになりたい*。	－.77				.65
C05	「暗い感じの子」を誘わないことに賛成。	.70		.34		.62
C03	「運動が苦手な子」を誘わないことに賛成。	.69				.59
C13	「暗い感じの子」と友だちになりたい*。	－.66			－.34	.61
C15	「暴力を振るう子」と友だちになりたい*。		－.78			.64
C16	「暴力を振るう子」と自分は違っている。		.72			.58
C01	「暴力を振るう子」を誘わないことに賛成。		.64			.53
C04	「運動が苦手な子」は変わるべきである。			.72		.58
C06	「暗い感じの子」は変わるべきである。			.70		.58
C02	「暴力を振るう子」は変わるべきである。		.46	.61		.64
C14	「暗い感じの子」と自分は違っている。				.84	.71
C12	「運動が苦手な子」と自分は違っている。				.73	.59
	二　乗　和	2.69	1.80	1.47	1.33	
	寄　与　率（%）	22.45	15.03	12.28	11.05	
	累積寄与率（%）	22.45	37.48	49.76	60.81	

*印の項目は逆転項目である。

られた。学年と性の交互作用には，有意差も傾向も認められなかった。一般相違尺度総得点の年齢的変化を性別に示したのが，図10である。図からは，学年が上がるに伴って得点が下降すること，及び男子の得点より女子の得点が低いことが観察される。

４．希望・信頼・寛容の相互的関連について

（１）希望尺度，信頼尺度，及び寛容尺度の相関

希望尺度の３つの下位尺度（児童希望・私の希望・社会希望），信頼尺度の３つの下位尺度（不信・自己信頼・関係信頼），及び寛容尺度の４つの下位尺度（一般拒否・暴力拒否・変化要請・一般相違），計10個の尺度の相関を，相関係数に有意差が認められたものについて示したのが，表９である。

表９　希望，信頼，寛容各尺度得点の相関

尺　度	児童希望	私の希望	社会希望	不　信	自己信頼	関係信頼	一般拒否	暴力拒否	変化要請	一般相違
児童希望		.48**	.13*	−.21**	.55**	.28**	−.30**	−	−	.28**
私の希望			.27**	−.33**	.53**	.36**	−.18**	−.13*	−	.27**
社会希望				−.20**	.13*	.23**	−.17**	−	.12*	−
不　信					−.34**	−.30**	−	−	−	−.38**
自己信頼						.37**	−	−	−	.36**
関係信頼							−.22**	−	−	.20**
一般拒否								.14*	.21**	.20**
暴力拒否									−	−
変化要請										.19**

この表から，希望尺度と信頼尺度については，それぞれの下位尺度間の相関が全て有意であることがわかる。一方，寛容尺度については，一般拒否と他の３つの尺度間の相関が有意であったが，暴力拒否と変化要請間，及び暴力拒否と一般相違間の相関は，有意でなかった。また，希望尺度と信頼尺度の全ての下位尺度間の相関が有意であり，希望と信頼の相互的関連が示された。加えて，希望尺度の３つの下位尺度と一般拒否尺度間の相関も，その全てが有意であった。ただし，私の希望尺度のみが，暴力拒否尺度と有意であること，社会希望尺度のみが変化要請尺度と有意であること，社会希望尺度と一般相違尺度間の相関が有意でないことなど，全面的に，希望尺度が寛容尺度と関連しているとは言えなかった。他方，信頼尺度の３つの下位尺度は，一般相違尺度とは有意に関連していたが，関係信頼尺度と一般拒否尺度との関連を除き，寛容尺度の他の３つの下位尺度と有意な関連が認められなかった。一般相違尺度は，寛容尺度ではないとの見解（渡辺，2003）もあり，信頼尺度が寛容尺度と相互的関連のもとにあるとは言えない結果であった。

（２）希望尺度，信頼尺度，及び寛容尺度についての重回帰分析

類似する尺度間の重回帰分析をすることには問題が残るが，希望，信頼，及び寛容の10尺度を用いて，希望と寛容の規定因について，ステップワイズ法によって検討した。表10は，その結果を示したものである。

何が先行要因であるか，何が結果であるかが明確でない場合，仮説的に先行要因と結果を想定しなければならない。希望と寛容について，寛容であるから希望が生まれると想定されないわけではないが，希望があるから寛容になることができると考える方が自然である。ここで，希望の規定因として寛容を位置づけない場合，すなわち，寛容の下位尺度を取り上げない場合，児童希望を規定するものとして自己信頼の重要性が示されていると読むことができる。私の希望にも自己信頼が大きく影響している。児童希望が私の希望に影響しているが，自己信頼に近い内容から児童希望が構成されているので，この結果も説明できる。また，私の希望の規定因としての社会希望の存在も自然である。このため，社会希望の規定因として私の希望を取

表10　希望・寛容についての重回帰分析結果（ステップワイズ法，標準偏回帰係数）

	児童希望	私の希望	社会希望	一般拒否	暴力拒否	変化要請	一般相違
R２乗	.42	.40	.22	.30	.05	.10	.29
F	51.80**	47.51**	19.77**	17.40**	4.95**	10.45**	28.90**
不　　信			−.25**				−.31**
自己信頼	.37**	.34**		.15*			.14*
関係信頼		.11**		−.19**	.13*		
一般拒否	−.29**		−.19**	−	.14*	.28**	.29**
暴力拒否				.11*	−		
変化要請			.15**	.19**		−	
一般相違	.15**			.28**			−
児童希望	−	.22**		−.40**		.14*	.21**
私の希望	.19**	−	.21**		−.17**		
社会希望		.22**	−	−.16**		.19**	

り上げないことにする。社会希望は，不信が低いことが規定因になっていると読むことができる。したがって，全体を通じて，希望の規定因として，自己信頼や不信などの信頼があげられるのである。

寛容の規定因は何であろうか。ここでは，寛容尺度の下位尺度間の相互規定については取り上げないことにする。まず，一般拒否が，児童希望によって大きく規定されていることがわかる。関係信頼や社会希望や自己信頼も，これを規定している。なお，関係信頼と社会希望には，その項目内容に共通する側面がある。暴力拒否は，私の希望と関係信頼に規定されている。また，変化要請は，社会希望や児童希望によって影響される。ただ，その方向は，希望がある場合には変化を要請する，すなわち，みんなに合わせることを求めるという方向であり，ある意味では，希望が寛容とは逆の方向に帰結するとも言える。もちろん，寛容内部の一般拒否が変化要請を規定すると言えるのは自明である。一般相違については，不信，一般拒否，児童希望，及び自己信頼が影響を与えている。先に指摘したように，一般相違は，寛容の指標でなく，自尊感情やプライドなどの指標である可能性があるのはいうまでもない。

学年別に見ると，どのような結果が示されるであろうか。小学生の重回帰分析結果は，より鮮明に，信頼が希望を規定するというものであった。たとえば，児童希望の規定因（R２乗＝.47，F＝25.46**）としては，自己信頼β＝.53，一般拒否β＝−.30,及び一般相違β＝.19が，私の希望の規定因（R２乗＝.37，F＝26.46**）としては，自己信頼β＝.53と関係信頼β＝.20が，社会希望の規定因（R２乗＝.21，F＝7.83**）としては，関係信頼β＝.24，変化要請β＝.25，及び不信β＝−.24が，それぞれ示された。寛容に関しては，一般拒否の規定因（R２乗＝.35，F＝11.91**）としては，児童希望β＝−.36,一般相違β＝.35，関係信頼β＝−.32，及び暴力拒否β＝.21が，暴力拒否の規定因（R２乗＝.06，F＝5.98*）としては，一般拒否β＝.25が，変化要請の規定因（R２乗＝.08，F＝7.77**）としては，社会希望β＝.28が，一般相違の規定因（R２乗＝.29，F＝9.03**）としては，不信β＝−.25，一般拒否β＝.43，関係信頼β＝.27，及び児童希望β＝.26が，それぞれ示された。

中学生の重回帰分析結果は，小学生の結果と幾分様相を異にしていた。児童希望の規定因（R２乗＝.49，F＝20.57**）としては，私の希望β＝.28，一般拒否β＝−.41，自己信頼β＝.30，及び一般相違β＝.19が，私の希望の規定因（R２乗＝.54，F＝34.22**）としては，自己信頼β＝.48，児童希望β＝.30，及び社会希望β＝.26が，社会希望の規定因（R２乗

＝.15，F＝7.61**）としては，私の希望β＝.49，及び自己信頼β＝－.32が，それぞれ示された。寛容に関しては，一般拒否の規定因（R２乗＝.45，F＝23.85**）としては，変化要請β＝－.39，児童希望β＝－.43，及び一般相違β＝.34が，変化要請の規定因（R２乗＝.26，F＝15.42**）としては，一般拒否β＝.51と私の希望β＝.22が，一般相違の規定因（R２乗＝.29，F＝11.67**）としては，不信β＝－.26，一般拒否β＝.40，及び児童希望β＝.27が，それぞれ示された。暴力拒否については，いずれもが規定因とならなかった。

高校生の重回帰分析結果においても，希望を信頼が規定している様子がみられた。児童希望の規定因（R２乗＝.30，F＝15.02**）としては，自己信頼β＝.35，私の希望β＝－.25，及び暴力拒否β＝－.19が，私の希望の規定因（R２乗＝.14，F＝17.30**）としては，児童希望β＝.38が，社会希望の規定因（R２乗＝.21，F＝9.13**）としては，関係信頼β＝.32，不信β＝－.32，及び一般相違β＝－.20が，それぞれ示された。寛容に関しては，一般拒否の規定因（R２乗＝.09，F＝5.16**）としては，関係信頼β＝－.29と一般相違β＝.22が，暴力拒否の規定因（R２乗＝.12，F＝7.01**）としては，児童希望β＝－.30と不信β＝－.24が，一般相違の規定因（R２乗＝.39，F＝33.11**）としては，自己信頼β＝.43と不信β＝－.35が，それぞれ示されたが，変化要請の規定因として有意であったものは，全く無かった。

（３）希望尺度，信頼尺度，及び寛容尺度についての共分散構造分析

希望，信頼，及び寛容の各尺度間の相関と重回帰分析の結果を考慮して，信頼が希望を，その希望が信頼を，それぞれ規定するという枠組みを作成して，AMOS による共分散構造分析（田部井，2001；山本・小野寺，2002）を試みた。図11は，その結果の一つを示したものである。不信，自己信頼，及び関係信頼からなる《信頼》が，児童希望と私の希望からなる《希望》を規定し，その《希望》が一般拒否と暴力拒否からなる《不寛容》を規定すると仮定することの可能な図である。しかし，適合度指標は，χ２乗値＝55.85，自由度＝12で有意であり，GFI＝.951や RMSEA＝.11も，当てはまりがよいとは言えない数値であった。にもかかわらず，今後の検討のための一つの仮定とすることは許されるのではないかと考えるのである。自己信頼の２項目を採用して《信頼》とし，児童希望の２項目を採用して《希望》とし，さらに，一般拒否の２項目を採用して《不寛容》とした場合の AMOS による共分散構造分析結果を示したのが，図12である。ここでの適合度指標は，いずれも当てはまりの良さを示すものであった。ちなみに，χ２乗値＝1.89，自由度＝６で，有意でなかった。また，GFI

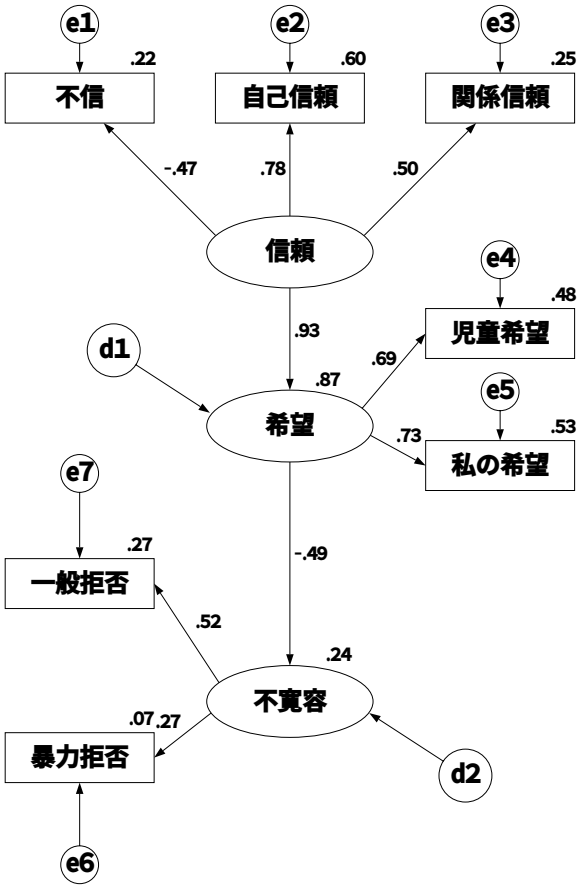

図11　信頼と希望と不寛容の相互関連１

＝.998，AGFI＝.992，RMSEA＝.000など，きわめて高い適合を示す数値であった。この図は，他者からの眼差しによる自己信頼それだけでは，多少とも否定的な特徴を持つ友人に対して，拒否的な方向へと作用するが，この自己信頼が，自己への信頼に関わる児童希望を経由するとき，多少とも否定的特徴を持つ友人への寛容に結びつくと解されるのである。

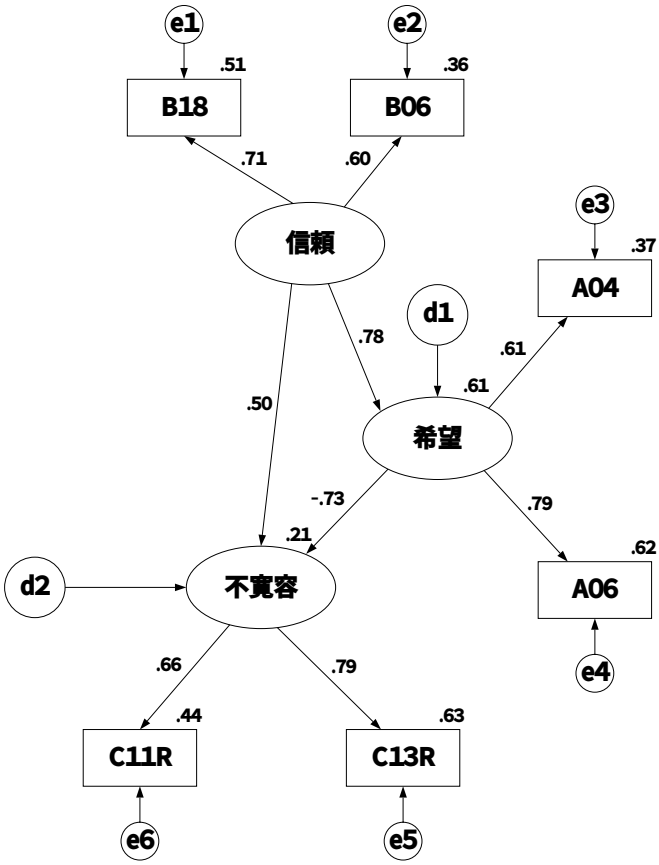

図12　信頼と希望と不寛容の相互関連２

要　約　的　討　論

この研究は，日本の地方都市に住む小学校４年生，中学校１年生，及び高校１年生，計301名を対象にして，希望，信頼，及び寛容の発達的変化を明らかにすると同時に，希望，信頼，及び寛容の相互的関連を明らかにすることを目的として実施された。

主要な研究結果は，以下の通りであった。

１．希望は，学年進行とともに低下する。

児童希望尺度の得点は，高校生で低下する傾向が見られた。すでに，小学生の時点で，平均的基準より下の位置にあった。これは，自己信頼と関わる項目から構成されている尺度であり，日本の児童生徒において，自己の受容が困難であること（渡辺ほか，2000）からの当然の帰結かもしれない。

また，私の希望尺度の得点は，学年進行とともに有意に低下し，女子の得点が男子の得点より低い傾向があった。小学生では，かなり高い水準にあると言えるが，高校生になると，平均的基準を下回るようになっていた。一貫した，私の希望に関する性による相違は，社会的な性役割の認知や社会的に置かれた位置によるものであろうか。

さらに，社会希望尺度の得点は，小学生でかなり高い水準にあったが，中学生で急に下降し，中学生と高校生では平均的基準よりかなり低くなっていた。これは，今日の社会的背景を反映しているとして説明することもできる。

２．学年進行とともに信頼感を喪失していくが，関係信頼については例外であり，特に女子においては一貫して保持され続けている。

不信尺度の得点は，小学生ではかなり低かったが，中学生で急に高くなっていた。中学生と高校生において高いとはいっても，平均的基準に留まっていた。ここでは，女子の得点が男子

の得点より一貫して高いことが注目される。対人関係における問題が，女子において顕著であると説明することも可能であるが，今後の検討課題である。

また，自己信頼の得点は，小学生において，すでに低い水準にあったが，学年進行とともにさらに低下していった。日本の児童生徒における自己信頼の低さは，何に起因するか，この研究では明らかでなく，今後の解明が求められている。

関係信頼については，男子において，学年進行に伴う下降が認められるものの，高校生男子においてすら平均的基準を超えていた。女子においては，常に男子より高く，学年進行による下降もなく，一貫して高い水準を保っていた。これは，日本の児童生徒の特徴である（渡辺，2003b）が，困難に満ちた社会を支える基盤になっているのかもしれないという地点からの検討が求められる。

３．この時期，寛容さは学年進行とともに失われていくが，他者への変化要請などは弱くなっていく。

一般拒否の得点は，小学生から中学生にかけて急上昇し，高校生においてもその水準を保っていた。思春期の児童生徒が，ある種の特徴について拒否的態度を取るようになるのは，以前の研究（Killen et al., 2002）でも明らかにされている。ただし，多少とも否定的な特徴を持つ友人への拒否をきく質問であったにもかかわらず，中学生や高校生においても，中性的な反応に留まっていたことは，日本においては，多くの児童生徒が受容的態度を持っていることを示していた。

一方，暴力拒否の得点は，学年進行とともに上昇していた。また，一般拒否と異なり，小学生の時期から拒否的態度が平均的基準より高く，さらに，中学生，高校生へと上昇していた。これは，「暴力」が一般の否定的特徴とは質的に異なる特徴として受け止められていることの反映であると考えられる。

変化要請の得点については，一般拒否や暴力拒否と違って，中学生から高校生にかけて低下する傾向が認められた。思春期が，集団に合わせるという方向を持つ時期であると同時に，自己の独自性を探究する時期でもあることから考察することができる（Killen et al., 2002：武ほか，2003）。後者の表現であると位置づけることができるのである。しかし，日本の児童生徒においては，他者への無関心，あるいは傍観者的態度の拡がり（森田・清永，1994）という立場から解することもできる。ここからは，寛容の指標として位置づけるには無理があると言える。小学生と中学生では平均的基準に近かったが，高校生では，平均的基準よりはるかに低くなっていた。

一般相違の得点については，これも寛容さの指標ではないと位置づけられる（武ほか，2003）が，小学生から高校生へかけて次第に下降していた。また，常に，男子の得点が女子の得点より高かった。小学生では，平均的基準よりかなり高く，高校生女子でやっと平均的基準に近づいていた。多少とも否定的な一般的特徴を持つ友人と違っているとの表現は何を意味しているか，今後検討する必要がある。自尊感情や「潔癖さ」に関連した指標として検討する方向も当然考えられるのである（武ほか，2003）。

４．希望の基底に信頼があり，寛容の基底に希望があると言えるのではないか。

希望と信頼が相互的関連のもとにあることが，明瞭に示された。相関をみると，希望と信頼

のそれぞれ３つの下位尺度間の相関はいずれもが有意であった。また，共分散構造分析においても，さまざまな枠組みを検討したが，希望の尺度と信頼の尺度間には，相互の強い結びつきが示されていた。しかし，重回帰分析の結果は，希望と信頼の全ての下位尺度間に相互的規定性を認めることはできなかった。たとえば，自己信頼と児童希望や私の希望間には，相互的規定性が確認されたが，不信や関係信頼と児童希望間などには，それが認められなかった。これは，それぞれの下位尺度には，他と区別される特質があり，同じ希望や信頼といっても，一纏めにするのではなく，個々に検討を深める必要性を指摘した資料として読むことができるのである。

次に，寛容と信頼あるいは寛容と希望には，どのような相互的関連が示されているかを検討することにしたい。まず，寛容と信頼の相関をみると，有意であったのは，関係信頼と一般拒否間，及び信頼の各尺度と一般相違間に限られ，その他の相関は有意でなかった。さきに述べたように，一般相違が寛容さを表しているか否かについては疑問があり，それ以外で唯一相関のあった関係信頼の尺度については，その項目内容が社会希望と類似する側面を含んでいた。これらのことは，寛容と信頼の相互規定性を肯定しないことを示している。一方，寛容と希望の相関をみると，希望の３つの尺度全てが，一般拒否に貢献していた。そのほかは鮮明でないが，私の希望が暴力拒否に，社会希望が変化要請に一定の貢献をしていた。全体として，寛容―信頼の関連と寛容―希望の相関を比較すると，はるかに寛容―希望の関連が強いと言えるのである。重回帰分析をみると，寛容への信頼の規定性は，一般相違への貢献を除外すると，関係信頼が一般拒否と暴力拒否に，自己信頼が一般拒否に一定の貢献をするに留まっていた。寛容への希望の規定性は，児童希望が一般拒否に大きな貢献をし，これに社会希望も関わっていた。その他，私の希望が暴力拒否に，社会希望や児童希望が変化要請にそれぞれ一定の貢献をしていた。児童希望の一般拒否への貢献を除くと，必ずしも希望と寛容が密接な相互規定的関連のもとにあるとは断定できなかった。

共分散構造分析の結果は，適合度指標から，明確に，信頼が希望を規定し，希望が寛容を規定すると言い切れなかったが，希望が信頼を規定し，信頼が寛容を規定するという以前の研究枠組み（渡辺，2002）が否定され，信頼が希望を規定し，希望が寛容を規定するという方向を示唆していると受け止めることができる。希望から寛容へという枠組みのもとで検討することは可能であったが，信頼から寛容へという枠組みのもとで検討することは無理であったからである。明快な結果が得られなかった１つの原因は，多様な希望や信頼や寛容を，一度に取り上げて検討したところにあると考えられた。さらには，寛容の尺度についての吟味が不十分であり，寛容の尺度を洗練してから相互関連を探究する必要があるとも考えられた。

最後に，自己信頼２項目を信頼とし，児童希望２項目を希望とし，さらに一般拒否２項目を不寛容とした場合の相互的関連について取り上げたい。ここにおけるあまりにも高い適合度指標について，全面的に過信することはできない。２項目ずつ選択することの可否については，今後とも検討を加える必要がある。それを考慮した上でもなお，他者から受け入れられているという感覚が，自己への信頼＝ここでは児童希望を育てるという結果が得られたことは注目に値する。これは，Erikson ら（エリクソン・エリクソン・キヴニック／朝長・朝長訳，1990）の指摘でもあるが，日本の児童生徒に欠けているとされる自己信頼を育てる方向への示唆が与えられているとは読み取れないであろうか。加えて，他者から受け入れられているとの感覚だけでは，むしろ寛容に対して否定的に作用すること，自己信頼が希望に媒介されるときに限っ

て寛容を涵養するという結論は，深い意味を持っていると考えられるのである。

〔付　記〕

調査に参加していただいた児童生徒の皆様，ご協力いただいた学校と先生方に心から感謝いたします。統計処理は，SPSS 社の SPSS11.5，及び Amos5.0によって行われた。

文　　献

天貝由美子　1995　高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響　*教育心理学研究*，43，364－371.

Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle (selected papers of E. H. Erikson)*. New York: Int. Univ. Press.

（エリクソン，E. H.／小此木啓吾編訳　1973　*自我同一性－アイデンティティとライフスタイル*　誠信書房）

Erikson, J. M., Erikson, E. H., & Kivnick, H. Q. 1986 *Vital involvement in old age.* New York: W. W. Norton.

（エリクソン，E. H.・エリクソン，J. M.・キヴニック，H. Q.／朝長正徳・朝長梨枝子訳　1990　*老年期－生き生きしたかかわりあい*　みすず書房）

Herth, K. 1991 Development and refinement of an instrument to measure hope. *Sch. Inq. Nurs. Pract*., 5（1），39－51.

Killen, M., Crystal, D. S., & Watanabe, H. 2002 Japanese and American Children's Evaluation of Peer Exclusion, Tolerance of Differences, and Prescriptions for Conformity. *Child Development*, 73, 1788－1802.

北村晴朗　1983　*希望の心理－自分を生かす*　金子書房

森田洋司・清永賢二，1994　*新版いじめ－教室の病い*　金子書房

大橋　明　2002a Herth Hope Scale 日本語版の作成および信頼性・妥当性の検討　*老年精神医学雑誌*，13，1187－1194.

大橋　明　2002b　高齢者の希望とその関連要因に関する研究　*大阪大学・人間科学部・行動学専修／大阪大学大学院・人間科学研究科・行動学専攻　卒業・修士・博士論文要約集－平成13年度*，１－４.

大橋　明・柏木哲夫・恒藤　暁　2002　高齢者の希望に関する研究－希望をもたらす・弱める事象と随伴する感情－　*老年社会科学*，23(２)，171.

大橋　明・恒藤　暁・柏木哲夫　2003　希望に関する概念の整理－心理学的観点から－　*大阪大学大学院人間科学研究科紀要*，29，101－124.

Rogers, C. R. 1951 *Client-centered therapy*. Houghton Mifflin.

（ロジャーズ，C. R.／友田不二男訳　1965　*ロージャズ選書２精神療法（９版）*　岩崎書店）

Rogers, C. R. 1959 A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. In Koch, S.(Ed.) *Psychology: A study of science. Vol.3.* McGraw-Hill.

（ロジャーズ，C. R.／伊東博編訳　1966　*ロージャズ全集４　セラピィ・パーソナリティ・対人関係の理論・サイコセラピィの過程*　岩崎学術出版社）

Rotter, J. B. 1967 A new scale for the measurement of interpersonal trust. *Journal of Personality*, 35, 651－665.

佐藤俊樹　2000　*不平等社会日本*　中央公論社

Snyder, C. R., Harris, C., Anderson, J. R., Holleran, S. A., Irving, I. M., Sigmon, S. T., Yoshinobu, I., Gibb, J., Langelle, C., & Harney, P. 1991 The will and the ways: Development and validation of an individual-differences measure of hope. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60(４)，570－585.

Snyder, C. R., Hoza, B., Pelham, W. E., Rapoff, M., Ware, L., Danovsky, M., Highberger, L., Rubinstein,

H., & Stahl, K. J. 1997 The development and validation of the Children's Hope Scale. *Journal of Pediatric Psychology*, 22, 399－421.

Snyder, C. R. 2000 The past and possible futures of hope. *Journal of Clinical Psychology*, 19(１), 11－28.

田部井明美　2001　*SPSS 完全活用法共分散構造分析（Amos）によるアンケート処理*　東京図書

橘木俊詔　1998　*日本の経済格差－所得と資産から考える*　岩波書店

高垣忠一郎　1999　*心の浮輪のさがし方－子ども再生の心理学*　柏書房

谷　冬彦　1998　青年期における基本的信頼感と時間的展望　*発達心理学研究*，９，35－44.

渡辺弘純　1994　*変わっている友人に対する児童生徒の反応に関する比較文化的研究*　平成５年度科学研究費研究成果報告書

渡辺弘純・武　　勤・濱田直美・クリスタル，D. S.　2000　他者と相違する自己の諸特徴の受容の発達に関する日中比較研究　*愛媛大学教育学部紀要　第Ⅰ部教育科学*，47(１)，13－28.

渡辺弘純　2001　*日本の児童生徒における他者との相違及び他者の相違の認知と受容に関する発達的検討*　平成10年度～平成12年度科学研究費研究成果報告書

渡辺弘純　2002　希望の心理学へ向けて－研究覚書－　*愛媛大学教育学部紀要　第Ⅰ部教育科学*，48(２)，27－42.

渡辺弘純　2003a　児童生徒の希望，信頼，及び寛容の相互関連　*日本心理学会第67回大会発表論文集*，1099.

渡辺弘純　2003b　現在と未来に対する考え方・感じ方：遼寧師範大学附属中学生と愛媛大学教育学部附属中学生の比較　*平成14年度愛媛大学学長裁量経費研究報告書*，123－145.

渡邉　俊　1999　*高校生における対人恐怖心性と信頼感*　愛媛大学教育学研究科修士論文（未公刊）

武　　勤・渡辺弘純・Crystal, D. S.・Killen, M. 2003　人間の多様性への寛容：児童生徒の仲間集団への「受け入れ」に関する中日比較研究　*愛媛大学教育学部紀要　第Ⅰ部教育科学*，50(１)，25－41.

山本嘉一郎・小野寺孝義　2002　*Amos による共分散構造分析と解析事例（第２版）*　ナカニシヤ出版